英文解釈 L01 第 6 講 to のまとまりが説明する相手を読む

学習目標

- to 不定詞のまとまりが、名詞・行為・感情・程度のどれを説明しているかを判断できる。
- 名詞を説明する to 句について、説明先の名詞と句内部の動作との関係を根拠に読める。
- 目的・感情の原因・程度の違いを捉え、原文の意味を保って自然な日本語に訳せる。

共通凡例

S＝主語、V＝述語動詞、O＝目的語、C＝補語、M＝修飾語。名詞のまとまりは〈〉、形容詞のまとまりは〔〕、副詞のまとまりは()で示す。矢印は説明するまとまりから説明先への関係を表す。主節骨格ビューでは文全体の S・V・O を示し、内部詳細ビューでは名詞の中心語と to 句の関係を示す。to 句内部の動作と主節の述語動詞は区別する。

概念・読み方

名詞を説明する to のまとまり

名詞を説明する to のまとまり

名詞の後ろに to 不定詞が続くとき、そのまとまりが前の名詞を説明していることがある。この場合、to 句は名詞の内容や用途などを後ろから補う働きをする。ただし、「名詞の直後に to がある」という位置関係だけでは不十分だ。**その名詞が、to 句の中の動作とどのようにつながるか**を確かめる必要がある。

次の英文を読んでみよう。

語注：mystery novel「推理小説」

主節骨格ビュー

〈The school library〉 has
S　V

〈〈several mystery novels〉〔to read (during 〈the summer vacation〉)〕〉.
O

S “The school library” / 主節の主語 / The school library が主節の主語。
V “has” / 主節の動詞 / has が主節の述語動詞。
O “several mystery novels to read during the summer vacation” / 主節の目的語 / 中心語 novels と、それを後ろから説明する to 句を含む名詞句全体。名詞内部の関係は詳細ビューで示す。

名詞内部詳細ビュー

〈The school library〉 has 〈〈several mystery novels〉
名詞の中心語

〔to read (during 〈the summer vacation〉)〕〉.
名詞を説明する to 句

phrase “novels” / 名詞の中心語 / novels は read という動作の対象。several mystery novels の中心語である。
phrase “to read during the summer vacation” / 名詞を説明する to 句 → phrase “novels” / to read during the summer vacation が novels を後ろから説明する。内部の動作は read であり、その対象が novels。主節の has とは別の動詞関係であり、実際に読んだことは述べていない。

©ミライコーチング

意味：その学校の図書館には、夏休み中に読む推理小説が何冊かある。

文の中心は The school library has several mystery novels（その学校の図書館には推理小説が何冊かある）である。to read during the summer vacation は、直前の mystery novels がどのような小説なのかを説明している。

ここで注目したいのは、novels と read の関係だ。read novels（小説を読む）という関係が成立する。つまり、novels は read という動作の対象であり、「小説が読む」という意味ではない。

もう一つの英文を比べてみよう。

語注：after school「放課後に」

主節骨格ビュー

〈The school library〉 also has 〈〈a quiet room〉 〔to study in (after school)〕〉.
S M V O

S “The school library” / 主節の主語 / The school library が主節の主語。
M “also” / 追加を表す副詞 → V “has” / also は主節の has にかかり、「〜も」という追加の意味を表す。
V “has” / 主節の動詞 / has が主節の述語動詞。
O “a quiet room to study in after school” / 主節の目的語 / 中心語 room と、それを後ろから説明する to 句を含む名詞句全体。名詞内部の関係は詳細ビューで示す。

名詞内部詳細ビュー

〈The school library〉 also has 〈〈a quiet room〉 〔to study in (after school)〕〉.
名詞の中心語　名詞を説明する to 句

phrase “room” / 名詞の中心語 / room は a quiet room の中心語。study の直接の対象ではなく、前置詞 in を介して勉強する場所を表す。
phrase “to study in after school” / 名詞を説明する to 句 → phrase “room” / to study in after school が room を後ろから説明する。内部の動作は study であり、room は study in the room という関係の場所に対応する。in を落としてはいけない。主節の has とは別の動詞関係であり、実際に勉強したことは述べていない。

意味：その学校の図書館には、放課後に勉強できる静かな部屋もある。

この文では、to study in after school が room を説明している。ただし、先ほどの read novels とは名詞と動詞の結び付き方が異なる。

study は、この文では「勉強する」という動作を表し、room を直接の目的語にしない。room は勉強する場所なので、study in the room（その部屋で勉強する）という関係になる。したがって、to study in の最後の in が必要だ。in を無視すると、部屋と勉強する動作との関係を正確に捉えられない。

二つの英文では、どちらも名詞の後ろの to 句がその名詞を説明している。しかし、novels は read の直接の対象であり、room は study in の in が示す場所である。同じ名詞修飾でも、**to 句の内部に名詞を対応させる位置が異なる**のだ。

また、どちらの文も、小説を実際に読んだことや、部屋で実際に勉強したことまでは述べていない。to 句が表す動作を、すでに起きた事実として訳さないことも重要だ。

本教材では、これら二つの to 句を名詞を後ろから説明するまとまりとして扱う。一方、別の英文では、名詞の後ろにある to 句を前の行為の目的と捉える分析も妥当な場合がある。名詞との近さだけで一つの解釈に決めず、動詞の働きと文全体の意味から判断する。

©ミライコーチング

名詞と to 句の関係を確かめる

名詞を説明する to 句は、すべて「〜するために」と訳すわけではない。説明される名詞が、to 句の動作の対象なのか、動作が行われる場所などを表すのかを確認する。必要な前置詞も含めて関係を捉えれば、英文にない行為者や実行事実を補わずに訳せる。

目的を説明する to

to 不定詞は、名詞ではなく、文の中心となる行為を説明することもある。この場合、to 句は「何をするために、その行為をしたのか」という目的を表す。大切なのは、to 句を見つけたらすぐに「〜するために」と訳すことではない。まず主節の行為を確定し、その行為と to 句の内容がどのようにつながるかを考えることだ。

次の英文を見てみよう。

語注：against the wall「壁に寄せて、壁際に」／make space for 〜「〜のための場所を確保する」

主節骨格ビュー

〈The students〉 moved 〈the desks〉 (against 〈the wall〉)
S V O M

(to make 〈space 〔for 〈a group activity〉〕〉).
M

S “The students” / 主節の主語 / The students が主節の動作主体。
V “moved” / 主節の動詞 / moved が主節の述語動詞。生徒たちが机を移動させたことを表す。
O “the desks” / 主節の目的語 / the desks が moved の対象。
M “against the wall” / 移動先 → V “moved” / against the wall は机を壁際へ移動させたことを示す。
M “to make space for a group activity” / 行為の目的 → V “moved” / to make space for a group activity は、机を壁際へ移動させた目的を説明する。主節の行為全体にかかり、space や activity という名詞だけを説明するものではない。場所の確保が実際に達成されたことまでは述べていない。

to 句内部詳細ビュー

〈The students〉 moved 〈the desks〉 (against 〈the wall〉) (to make 〈space
S V V O

〔for 〈a group activity〉〕〉).
M

S “The students” / 動作主体 / The students は主節の moved の主体であり、to 句内部の make の意味上の主体でもある。別の行為者は示されていない。
V “moved” / 主節の動詞 / moved は実際に行われた机の移動を表す。to 句内部の make とは区別する。
V “make” / to 句内部の動詞 → V “moved” / make は to 不定詞内部の動作を表す。to make space for a group activity 全体が moved の目的を示す。主節の述語動詞ではない。
O “space” / to 句内部の目的語 / space は make の対象。make space で場所を確保するという意味になる。主節の目的語 the desks とは異なる。
M “for a group activity” / 場所の用途 → O “space” / for a group activity は space の用途を説明する。グループ活動のための場所という関係であり、活動の実施や場所の確保の成功を断定しない。

意味：生徒たちは、グループ活動の場所を確保するために、机を壁際へ移動させた。

この文の中心は The students moved the desks against the wall（生徒たちは机を壁際へ移動させた）である。まず、誰が何をしたのかをここで確定する。

その後ろの to make space for a group activity は、机を移動させた目的を説明している。生徒たちは「グループ活動の場所を確保する」という目的で「机を移動させた」のだ。

©ミライコーチング

ここで to 句が説明しているのは、直前の wall という名詞ではなく、主節の moved the desks against the wall という行為である。名詞を後ろから説明する場合とは、**説明を受ける相手が異なる**。

もう一つの英文でも確かめよう。

語注：pick up「（置いてあるものを）取る、回収する」

主節骨格ビュー

Mina (S) returned (V) (to 〈the classroom〉) (M) (to pick up 〈her notebook〉) (M) (before 〈the afternoon lesson〉) (M).

S “Mina” / 主節の主語 / Mina が主節の動作主体。
V “returned” / 主節の動詞 / returned が主節の述語動詞。ミナが戻ったという過去の行為を表す。
M “to the classroom” / 戻った場所 → V “returned” / to the classroom は returned の移動先を表す。ここでの to は前置詞であり、後ろに名詞句 the classroom が続く。
M “to pick up her notebook” / 行為の目的 → V “returned” / to pick up her notebook は returned の目的を表す。二つ目の to は不定詞を導く。ノートを取るという目的は示されているが、実際に回収できたかどうかは分からない。
M “before the afternoon lesson” / 戻った時刻 → V “returned” / before the afternoon lesson は本教材では returned にかかると読み、ミナが午後の授業の前に教室へ戻った時刻を示す。to 句内部の pick up だけにかかるものとして固定しない。

to 句内部詳細ビュー

Mina (S) returned (V) (to 〈the classroom〉) (M) (to pick up (V) 〈her notebook〉 (O)) (before 〈the afternoon lesson〉) (M).

S “Mina” / 動作主体 / Mina は returned の主体であり、to 句内部の pick up の意味上の主体でもある。
V “returned” / 主節の動詞 / returned は実際に行われた移動を表す。to 句内部の pick up とは別の動作。
M “to the classroom” / 移動先 → V “returned” / to the classroom の to は移動先を示す前置詞。不定詞の to とは区別する。
V “pick up” / to 句内部の動詞 → V “returned” / pick up は「取る、回収する」を表す。to pick up her notebook 全体が returned の目的を説明する。pick up は主節の述語ではなく、回収の達成も断定しない。
O “her notebook” / to 句内部の目的語 → V “pick up” / her notebook が pick up の対象。her は Mina を指す所有表現であり、ミナ自身のノートを表す。
M “before the afternoon lesson” / 主節の時 → V “returned” / 本教材では before the afternoon lesson を returned の時を表すまとまりとして採用する。午後の授業の前に戻ったという意味であり、ノートの回収が済んだことを意味しない。

意味：ミナは午後の授業の前に、自分のノートを取りに教室へ戻った。

主節の行為は Mina returned to the classroom（ミナは教室へ戻った）である。to pick up her notebook は、ミナが教室へ戻った目的を表している。「ノートを取りに」という意味を主節の行為につなぐことで、文全体の意味が自然に組み立てられる。

この英文には to が二度現れるが、働きは同じではない。returned to the classroom の to は移動の行き先を示す前置詞であり、to pick up の to は動詞の原形を導いて目的を表す。to という語の見た目だけでなく、後ろに続く語と文中での働きを確認する必要がある。

目的と達成を区別する

目的を表す to 句は、その行為をした理由や狙いを示すが、目的が実際に達成されたことまでは保証しない。

例えば、ミナが教室へ戻ったことは英文から分かるが、ノートを実際に手に入れたかどうかは分からない。「ノートを取って戻った」と訳すと、原文にない達成の事実を加えてしまう。

主節の行為と to 句の目的を区別し、英文に示されていない結果や行為者を補わずに訳すことが重要だ。

感情の原因を説明する to

to 不定詞は、うれしい・驚いた・安心したといった感情について、その気持ちが生じた原因を説明することもある。この場合、to 句が答えているのは「何をするために」ではなく、**「何があって、その気持ちになったのか」**という問いだ。

次の英文を見てみよう。

語注：delighted「とてもうれしい」／childhood friend「幼なじみ」／school festival「学校祭、文化祭」

Mika (S) was (V) 〔delighted (C) (to see 〈her childhood friend〉 (at 〈the school festival〉) (on Saturday))〕 (M).

S “Mika” / 主節の主語 / Mika が主節の主語であり、感情を経験する人。to 句内部の see の意味上の主体でもある。
V “was” / 主節の動詞 / was が主節の述語動詞。過去の状態を表す。
C “delighted” / 感情を表す形容詞 / delighted は Mika の強いうれしさを表す。後続の to 句と合わせて感情の内容を捉える。
M “to see her childhood friend at the school festival on Saturday” / 感情の原因 → C “delighted” / to see her childhood friend at the school festival on Saturday は delighted という感情が生じた原因を説明する。Mika が幼なじみに会ったことによる喜びであり、会うことを目的に喜んだという意味ではない。この過去肯定文では、会った出来事が実際に起きたものとして述べられている。

Mika (S) was (V) 〔delighted (C) (to see (V) 〈her childhood friend〉 (O) (at 〈the school festival〉) (M) (on Saturday))〕 (M).

S “Mika” / 感情を経験する人 / Mika は主節の主語。to 句内部の see についても意味上の主体となる。
V “was” / 主節の動詞 / was は主節の述語動詞。to 句内部の see とは区別する。
C “delighted” / 感情の中心 / delighted がうれしさを表す形容詞。to see 以下の出来事が、この感情の原因を説明している。
V “see” / to 句内部の動詞 → C “delighted” / see は直前の to によって導かれる非定形の動詞であり、主節の述語動詞ではない。意味上の主体は Mika。to see 以下のまとまりが delighted の原因を表す。
O “her childhood friend” / see の対象 → V “see” / her childhood friend が see の目的語。her は Mika を指し、ミカの幼なじみを表す。
M “at the school festival” / 出会った場所 → V “see” / at the school festival は幼なじみに会った場所・場面を説明する。
M “on Saturday” / 出来事の時 → V “see” / on Saturday は土曜日という時の情報を付け加える。学校祭の開催日を示す読みとも整合する。この例文の原因となる出会いは過去の出来事として述べられている。

意味：ミカは土曜日の学校祭で幼なじみに会えて、とてもうれしかった。

文の中心は Mika was delighted（ミカはとてもうれしかった）である。delighted はミカの感情を表している。その後ろの to see her childhood friend at the school festival on Saturday は、何がミカをうれしい気持ちにさせたのかを説明している。

つまり、「幼なじみに会ったこと」が「とてもうれしかった」という感情の原因になっている。「幼なじみに会うためにうれしかった」と目的として訳すと、感情が生じた理由ではなく、喜ぶこと自体が何かの目的を達成する手段であるかのような意味になってしまう。

別の感情を表す英文でも確認しよう。

語注：surprised「驚いた」／pond「池」／beside ～「～のそばに」

〈The students〉 were 〔surprised
S V C

(to find 〈a small turtle〉 (beside 〈the school pond〉) (after lunch))〕.
M

S “The students” / 主節の主語 / The students が主節の主語であり、驚きを経験した人たち。to 句内部の find の意味上の主体でもある。
V “were” / 主節の動詞 / were が主節の述語動詞。過去の状態を表す。
C “surprised” / 感情を表す形容詞 / surprised は生徒たちが驚いたという感情を表す。
M “to find a small turtle beside the school pond after lunch” / 感情の原因 → C “surprised” / to find a small turtle beside the school pond after lunch は surprised という感情が生じた原因を説明する。生徒たちが小さなカメを見つけたことで驚いたという関係であり、カメを見つけるために驚いたという目的ではない。この過去肯定文では、発見が実際に起きた出来事として述べられている。

解説

〈The students〉 were 〔surprised (to find 〈a small turtle〉 (beside 〈the school pond〉) (after lunch))〕.
S V C V O M M

S “The students” / 感情を経験する人 / The students は主節の主語。to 句内部の find についても意味上の主体となる。
V “were” / 主節の動詞 / were は主節の述語動詞。to 句内部の find とは区別する。
C “surprised” / 感情の中心 / surprised が驚きを表す形容詞。to find 以下の出来事が、その驚きの原因を説明している。
V “find” / to 句内部の動詞 → C “surprised” / find は直前の to によって導かれる非定形の動詞。意味上の主体は The students である。カメを見つけたことが驚きの原因であり、find は主節の述語動詞ではない。
O “a small turtle” / find の対象 → V “find” / a small turtle が find の目的語。発見されたのは 1 匹の小さなカメである。
M “beside the school pond” / 発見した場所 → V “find” / beside the school pond は、この詳細ビューではカメを見つけた場所として扱う。カメが学校の池のそばにいたという名詞側の位置説明として捉える読みも自然であり、どちらか一方だけを唯一の正しい分析とはしない。
M “after lunch” / 発見した時 → V “find” / after lunch はカメを見つけた時を示す。昼食後の発見が驚きの原因となったという読みであり、感情を表す to 句すべてについて出来事の実現を保証する一般規則ではない。

意味：生徒たちは昼食後、学校の池のそばで小さなカメを見つけて驚いた。

主節の The students were surprised は、生徒たちが驚いたことを表す。to find a small turtle beside the school pond after lunch は、その驚きの原因を説明している。カメを見つけたことによって、生徒たちが驚いたという関係だ。

ここでも、「カメを見つけるために驚いた」と訳すと意味が変わる。to 句が示しているのは、驚くという状態の目的ではなく、驚きを引き起こした出来事である。

この二つの英文では、delighted や surprised という感情を表す形容詞と、to 句が示す出来事の関係から、原因を表す読みが成立する。また、通常の読みでは、友人に会ったこともカメを見つけたことも実際に起きた出来事として述べられている。

ただし、感情を表す形容詞の後ろに to 句があれば、必ず起きた出来事の原因を表すとは限らない。英文によっては、これから行うことへの気持ちを表す場合もある。感情語の種類と文全体の意味を確かめ、出来事が実際に起きたのか、これから起こることなのかを判断する必要がある。

感情とその原因を結び付ける

感情の原因を説明する to 句を読むときは、まず主節の形容詞が表す気持ちを確定し、その後で to 句の内容を「その気持ちになった原因」として結び付ける。

目的を表す to 句との違いは、説明する相手にある。目的なら主節の行為に対して「何のために」、感情の原因なら主節の感情に対して「何があって」と問いかけると、意味関係を確かめやすい。

©ミライコーチング

程度と to の関係

to 不定詞は、too や enough と結び付き、ある行為を基準に性質の程度を説明することがある。このとき重要なのは、形容詞だけを訳すのではなく、「**何をするには、どの程度なのか**」という関係を読み取ることだ。

too は「〜すぎる」、enough は「十分に〜」という意味を表す。しかし、どちらも to 句が続く場合には、その行為を基準として程度を判断する必要がある。

too＋形容詞＋to：行為に対して程度が過ぎる

次の英文を見てみよう。

語注：suitcase「スーツケース」／carry 〜 up the stairs「〜を階段の上まで運ぶ」／without help「助けを借りずに」

〈The suitcase〉 was 〔too heavy (for Rina to carry (up 〈the stairs〉) (without help))〕.
S V C M

S “The suitcase” / 主節の主語 / The suitcase が主節の主語。重さについて述べられている対象であり、to 句内部の carry の意味上の対象にも対応する。
V “was” / 主節の動詞 / was が主節の述語動詞。スーツケースの過去の状態を表す。
C “too heavy” / 程度を表す補語 / too heavy は重さが基準に対して過剰であることを示す。heavy が重さという性質を表し、too がその程度を示している。
M “for Rina to carry up the stairs without help” / 程度の判断基準 → C “too heavy” / for Rina to carry up the stairs without help は too heavy の程度を判断する基準を示す。Rina が助けを借りずにスーツケースを階段の上まで運ぶには重すぎたという関係。for Rina は to 句内部の動作主体を示すもので、主節の目的を表す前置詞句ではない。運搬が実際に行われたことは述べていない。

解説

〈The suitcase〉 was 〔too heavy (for Rina to carry (up 〈the stairs〉) (without help))〕.
carry の意味上の対象　C　S　V　M　M

phrase “suitcase” / carry の意味上の対象 → V “carry” / suitcase は主節の主語 The suitcase の中心語である。一方、to 句内部では carry の対象に対応する。スーツケースが運ぶ側なのではなく、リナに運ばれる対象である。
C “too heavy” / 重さの程度 / too heavy がスーツケースの重さを表す。後続の for Rina to carry up the stairs without help が、重すぎると判断する基準になる。
S “Rina” / to 句内部の動作主体 → V “carry” / Rina が carry の意味上の主体。直前の for と合わせて for Rina となり、誰が運ぶのかを示す。主節の主語は The suitcase であり、Rina とは異なる。
V “carry” / to 句内部の動詞 → C “too heavy” / carry は to によって導かれる非定形の動詞であり、主節の述語動詞 was とは区別する。for Rina to carry up the stairs without help 全体が too heavy の程度を判断する基準である。carry の対象は The suitcase に対応する。
M “up the stairs” / 運ぶ経路 → V “carry” / up the stairs は階段を上って運ぶという経路を示す。主節の状態ではなく、to 句内部の carry に結び付く。
M “without help” / 運搬の条件 → V “carry” / without help は助けを借りずにという条件を示す。この条件を落とすと、助けがあっても運べないという原文にない意味へ広がってしまう。実際に運ぼうとしたことや運搬の成否は断定しない。

意味：そのスーツケースは、リナが人の助けを借りずに階段を上って運ぶには重すぎた。

文の中心は The suitcase was too heavy（そのスーツケースは重すぎた）である。ただし、heavy だけでは「重い」という性質しか分からない。too が加わることで、ある基準に対して重さが過剰であることが示される。

その基準を具体的に表しているのが、for Rina to carry up the stairs without help というまとまりだ。ここでは、リナが助けを借りずにスーツケースを階段の上まで運ぶという行為に対して、その重さが過剰であると述べている。

for Rina は carry という動作を行う人を示す。また、carry の対象は文頭の The suitcase である。つまり、スーツケースが何かを運ぶのではなく、リナがスーツケースを運ぶ関係だ。

この文では、助けを借りずに運ぶことができないほど重い、という読みになる。ただし、too が常に物理的な不可能を表すわけではない。行為や文脈によっては、程度が過剰で、その行為が不適切だったり、ためらわれたりすることも表す。

解説

形容詞＋enough＋to：行為に対して十分な程度がある

今度は enough を使った英文を見てみよう。

語注：ladder「はしご」／reach「～に届く」／top shelf「一番上の棚」

〈The ladder〉 was 〔tall enough
S V C

(for Yuki to reach 〈〈the top shelf〉 〔in 〈the kitchen〉〕〉)〕.
M

S “The ladder” / 主節の主語 / The ladder が主節の主語。高さについて述べられている対象であり、to 句内部の reach の動作主体ではない。
V “was” / 主節の動詞 / was が主節の述語動詞。はしごの過去の状態を表す。
C “tall enough” / 程度を表す補語 / tall enough は高さが必要な程度に達していたことを示す。tall が高さという性質を表し、enough がその程度の十分さを示している。
M “for Yuki to reach the top shelf in the kitchen” / 程度の判断基準 → C “tall enough” / for Yuki to reach the top shelf in the kitchen は tall enough の程度を判断する基準を示す。ユキの手が台所の一番上の棚に届くのに、はしごの高さが十分だったという関係。for Yuki は to 句内部の動作主体を示し、主節の目的を表す前置詞句ではない。実際にはしごを使用したことや棚に手が届いたことまでは述べていない。

〈The ladder〉 was 〔tall enough (for Yuki to reach
高さを評価される対象 C S V

〈〈the top shelf〉 〔in 〈the kitchen〉〕〉)〕.
O

phrase “ladder” / 高さを評価される対象 / ladder は主節の主語 The ladder の中心語。tall enough によって、そのはしごの高さが説明される。reach の動作主体ではない。
C “tall enough” / 高さの程度 / tall enough は必要な高さが十分にあったことを表す。後続の for Yuki to reach the top shelf in the kitchen が、その十分さを判断する基準になる。
S “Yuki” / to 句内部の動作主体 → V “reach” / Yuki が reach の意味上の主体。直前の for と合わせて for Yuki となり、ユキの手が棚に届くことを基準に高さを判断する際の人物を示す。主節の主語 The ladder とは区別する。
V “reach” / to 句内部の動詞 → C “tall enough” / reach は to によって導かれる非定形の動詞であり、主節の述語動詞 was とは区別する。for Yuki to reach the top shelf in the kitchen 全体が tall enough の程度を判断する基準である。Yuki が reach の主体となり、the top shelf in the kitchen がその対象となる。
O “the top shelf in the kitchen” / reach の対象 → V “reach” / the top shelf in the kitchen 全体が reach の目的語。中心語は shelf で、in the kitchen はその棚の場所を示す。はしごの高さは棚に手が届くのに十分だったが、実際にユキの手が棚に届いたことまでは述べていない。

意味：そのはしごは、ユキの手が台所の一番上の棚に届くのに十分な高さだった。

文の中心は The ladder was tall enough（そのはしごは十分な高さがあった）である。では、何をするのに十分なのだろうか。

その基準が for Yuki to reach the top shelf in the kitchen に示されている。ユキの手が台所の一番上の棚に届くのに、はしごの高さが十分であるという意味だ。

ここでも、to 句内部の動作を行うのは for Yuki が示すユキであり、reach の対象は the top shelf である。はしご自体が棚に手を伸ばすわけではない。

注意したいのは、enough が表すのは行為に必要な程度が満たされているということだ。この文から、はしごにはユキの手が棚に届くのに十分な高さがあったことは分かる。しかし、ユキが実際にはしごを使ったことや、棚に手が届いたことまでは述べられていない。

too と enough は to 句の行為を基準に読む

too＋形容詞＋to は、to 句の行為をするには、その性質の程度が過剰であることを表す。

形容詞＋enough＋to は、to 句の行為をするのに、その性質の程度が十分であることを表す。

どちらも to 句を機械的に「〜するために」と訳すのではなく、形容詞が表す性質と to 句の行為を結び付けて読む。また、程度について述べていることと、行為が実際に行われたことを混同しない。

1

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：blanket「毛布」／camping trip「キャンプ旅行」

Two warm blankets to take on tomorrow's camping trip are in the blue bag by the door.

a. 「to take on tomorrow's camping trip」が説明する名詞と、その名詞が take という動作に対してどのような関係にあるかを、一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

例題 1 の解答・解説

a. 構造の解答

説明先は blankets（毛布）である。blankets は take という動作の対象であり、「毛布を持っていく」という関係になっている。

〈〈Two warm blankets〉〔to take (on 〈tomorrow's camping trip〉)〕〉 are (in 〈〈the blue bag〉〔by 〈the door〉〕〉).
S　V　M

S “Two warm blankets to take on tomorrow's camping trip” / 主節の主語全体 / Two warm blankets to take on tomorrow's camping trip が主語全体。中心語は blankets であり、to 句はその名詞を後ろから説明する。毛布を実際に持っていったとは述べていない。
V “are” / 主節の動詞 / are だけが主節の述語動詞。to 句内部の take とは区別する。
M “in the blue bag by the door” / 毛布の所在 → V “are” / in the blue bag by the door は毛布の所在を示す。by the door は青いバッグの位置を説明する。

〈〈Two warm blankets〉〔to take (on 〈tomorrow's camping trip〉)〕〉 are (in 〈〈the blue bag〉〔by 〈the door〉〕〉).
主語内の中心名詞　名詞を説明する to 句　V

phrase “blankets” / 主語内の中心名詞 / blankets は主語全体の中心語。to 句内部の take の意味上の対象でもある。毛布が何かを持っていくわけではない。
phrase “to take on tomorrow's camping trip” / 名詞を説明する to 句 → phrase “blankets” / to take on tomorrow's camping trip が blankets を後ろから説明する。内部の動詞は take で、その対象が blankets。持っていく人や、実際に持っていった事実は示されていない。
V “are” / 主節の動詞 / are が主節の述語動詞。to 句内部の take は主節の述語動詞ではない。

b. 全文和訳 直訳 明日のキャンプ旅行に持っていくための暖かい毛布が 2 枚、ドアのそばの青いかばんの中にある。

満点の訳

明日のキャンプに持っていく暖かい毛布が 2 枚、ドアのそばの青いバッグに入っている。

構造と読み方の解説

まず文の中心を確かめる。主語の中心は Two warm blankets の blankets であり、述語は are in the blue bag by the door である。文の骨格は「2 枚の暖かい毛布が、ドアのそばの青いバッグの中にある」という現在の所在を表している。

そのうえで、blankets の後ろに続く to take on tomorrow's camping trip に注目する。このまとまりは、どのような毛布なのかを説明している。take blankets（毛布を持っていく）という関係が成立するため、blankets は take の対象だと分かる。

ここで、毛布が何かを持っていくと考えてはいけない。また、to 句を「毛布がバッグの中にある」という状態の目的として捉える必要もない。この文では、to 句は主語の中心となる名詞 blankets を後ろから説明している。

意味を保つための注意

英文が述べているのは、明日のキャンプに持っていく毛布が 2 枚あり、それらがドアのそばの青いバッグの中にあるということだ。毛布を実際に持っていったことや、キャンプがすでに行われたことは述べていない。

したがって、「明日のキャンプに持っていった毛布」と過去の実行事実を加えて訳すのは不適切である。一方、「持っていく予定の毛布」「持参する毛布」など、まだ実行していないことを保つ自然な表現は認められる。

名詞を説明する to 句を読むときは、名詞が動作の主体なのか対象なのかを確認し、その関係を保ったまま名詞全体を訳すことが重要だ。

2

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：photographer「写真家」／steep「急な」／sunset「日没」／lighthouse「灯台」／bay「湾」

The photographer climbed a steep hill before sunset to take pictures of the old lighthouse across the bay.

a. 「to take pictures of the old lighthouse across the bay」が説明している文中の行為と、その行為との意味関係を一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

例題 2 の解答・解説

a. 構造の解答

説明先は climbed a steep hill before sunset（写真家が日没前に急な丘を登った）という主節の行為である。

to 句は、その行為の目的を表しており、「湾の向こうにある古い灯台の写真を撮るために、丘を登った」という関係になっている。

〈The photographer〉 climbed 〈a steep hill〉 (before sunset)
S V O M

(to take 〈pictures 〔of 〈〈the old lighthouse〉 〔across 〈the bay〉〕〉〕〉).
M

S “The photographer” / 主節の主語 / The photographer が丘を登った主体。後続の to 句にある take の意味上の主体もこの写真家である。
V “climbed” / 主節の動詞 / climbed が過去の主節の行為を表す。丘を登ったことは述べられているが、撮影が実現したとは限らない。
O “a steep hill” / 主節の目的語 / a steep hill は climbed の対象。to 句内部の take の対象ではない。
M “before sunset” / 登った時 → V “climbed” / before sunset は丘を登った時を示す。
M “to take pictures of the old lighthouse across the bay” / 登った目的 → V “climbed” / to take pictures of the old lighthouse across the bay は丘を登った目的を示す。across the bay は本教材では lighthouse の場所を説明する。写真を撮れたという事実は示されていない。

〈The photographer〉 climbed 〈a steep hill〉 (before sunset) (to take
V V

〈pictures 〔of 〈〈the old lighthouse〉 〔across 〈the bay〉〕〉〕〉).
O

V “climbed” / 主節の動詞 / climbed は写真家が実際に行った行為。丘を登った目的を後続の to 句が説明する。
V “take” / to 句内部の動詞 / take は to 不定詞内部の動詞で、意味上の主体は The photographer。take pictures of 〜で「〜の写真を撮る」。主節の climbed とは別の行為であり、撮影の達成は断定しない。
O “pictures of the old lighthouse across the bay” / to 句内部の目的語 / pictures of the old lighthouse across the bay が take の対象となる名詞句。of 以下は何の写真かを示し、across the bay は灯台の位置を説明する。灯台との関係は別の詳細ビューで示す。

〈The photographer〉 climbed 〈a steep hill〉 (before sunset) (to take 〈pictures 〔of
〈〈the old lighthouse〉 〔across 〈the bay〉〕〉〕〉).
場所を説明される名詞　灯台の場所

phrase “lighthouse” / 場所を説明される名詞 / lighthouse は the old lighthouse の中心語。何の写真かを示す of 以下の名詞句に含まれる。
phrase “across the bay” / 灯台の場所 → phrase “lighthouse” / across the bay は、この教材では lighthouse を後ろから説明する。「湾の向こうにある灯台」という関係を示し、写真家が湾を渡ったとは述べていない。

b. 全文和訳

直訳

その写真家は、湾の向こうにある古い灯台の写真を撮るために、日没前に急な丘を登った。

満点の訳

写真家は、湾の向こうにある古い灯台を撮影しようと、日が沈む前に急な丘を登った。

構造と読み方の解説

まず文の中心を確かめる。主語は The photographer（その写真家）、述語の中心は climbed（登った）である。a steep hill は登った場所を表し、before sunset はその行為の時を示している。ここまでで、「写真家が日没前に急な丘を登った」という主節の内容が確定する。

続く to take pictures of the old lighthouse across the bay は、なぜ写真家が丘を登ったのかを説明している。take pictures of 〜は「〜の写真を撮る」という意味であり、その対象は the old lighthouse across the bay（湾の向こうにある古い灯台）である。

つまり、写真家が行った「丘を登る」という行為と、「灯台の写真を撮る」という目的が結び付いている。この to 句は、丘や日没を説明するのではなく、主節の行為全体に目的を付け加えている。

意味を保つための注意

ここで区別したいのは、**実際に行ったことと、その行為の目的**である。

英文の climbed は過去形なので、写真家が丘を登ったことは過去の事実として述べられている。一方、to take pictures of 〜は丘を登った目的を表すだけであり、実際に写真を撮ったことまでは保証しない。

したがって、「写真家は丘を登り、灯台の写真を撮った」と訳すと、原文にない撮影の実行事実を加えてしまう。また、「灯台の写真を撮れた」と訳せば、撮影の成功まで断定することになる。

「灯台を撮影するために」「灯台の写真を撮ろうと」など、目的を表す自然な言い換えは認められる。ただし、写真家が丘を登ったこと、登ったのは日没前であること、撮影の対象が湾の向こうの古い灯台であることは保つ必要がある。

目的を表す to 句では、まず主節の行為を確定し、その後に「何のためにその行為をしたのか」を結び付ける。目的を実現済みの結果に変えずに訳すことが重要だ。

3

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：living room「居間」／loud「音が大きい」／concentrate on ～「～に集中する」

The music in the living room was too loud for the children to concentrate on their homework.

a. 「to concentrate on their homework」が説明する相手と、その相手との意味関係を一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

例題 3 の解答・解説

a. 構造の解答

説明先は too loud が表す、居間の音楽の音量の程度である。

to concentrate on their homework は、その程度を判断する基準となる行為を示している。「子どもたちが宿題に集中するには、音楽の音量が大きすぎる」という関係になっている。

〈〈The music〉〔in〈the living room〉〕〉 was 〔too loud (for 〈the children〉 to concentrate (on 〈their homework〉))〕.
S　V　C　M

S “The music in the living room” / 主節の主語 / The music in the living room が主節の主語全体。in the living room は音楽の場所を説明する。
V “was” / 主節の動詞 / was が主節の述語動詞。音楽の過去の状態を示す。
C “too loud” / 音量の程度 / too loud は音量が基準に対して大きすぎるという状態を表す。子どもたち自身の能力が不足しているという意味ではない。
M “for the children to concentrate on their homework” / 程度の判断基準 → C “too loud” / for the children to concentrate on their homework は too loud の程度を判断する基準を示す。子どもたちが自分たちの宿題に集中するには音が大きすぎたという関係。for the children は to 句内部の動作主体を示し、目的の前置詞句ではない。宿題を実際に始めたとは述べていない。

〈〈The music〉〔in〈the living room〉〕〉 was 〔too loud (for 〈the children〉 to concentrate (on 〈their homework〉))〕.
V　C　S　V　M

V “was” / 主節の動詞 / was が主節の述語動詞。to 句内部の concentrate とは区別する。
C “too loud” / 程度を表す形容詞句 / too loud に対する判断基準は for the children to concentrate on their homework 全体である。集中する行為に対して音量が過剰だったという意味になる。
S “the children” / to 句内部の主体 / children は直前の for the children によって示される concentrate の意味上の主体。音楽ではなく子どもたちが集中する。
V “concentrate” / to 句内部の動詞 / concentrate は to によって導かれる非定形の動詞。主節の was とは別であり、子どもたちが宿題を始めたことや能力が欠けていることは示さない。
M “on their homework” / 集中する対象 / on their homework は concentrate on ～の一部として集中の対象を示す。their は children を指し、子どもたち自身の宿題を表す。

b. 全文和訳

直訳

居間の音楽は、子どもたちが自分たちの宿題に集中するには音が大きすぎた。

満点の訳

居間の音楽は音量が大きすぎて、子どもたちが宿題に集中できる状態ではなかった。

構造と読み方の解説

まず文の中心を確かめる。主語は The music in the living room（居間の音楽）、述語の中心は was であり、too loud が音楽の状態を説明している。

ここで loud は音の大きさを表す形容詞であり、too が付くことで、ある基準に対して音量が過剰であることが示される。では、何をするには音量が大きすぎるのだろうか。

その基準を示しているのが、for the children to concentrate on their homework である。for the children は to 句内部の動作を行う人を示し、concentrate on their homework は「自分たちの宿題に集中する」という行為を表している。

つまり、音楽が宿題に集中するのではなく、子どもたちが集中するという関係だ。その行為に対して、居間の音楽の音量が過剰であると述べている。

ここで to concentrate on their homework を「宿題に集中するために」と目的として訳すと、文の意味が変わってしまう。この to 句は、音楽が大きかった目的を表しているのではない。**子どもたちが宿題に集中するという行為を基準に、音楽の音量がどの程度だったか**を説明している。

意味を保つための注意

この英文では、too loud は子どもたちが宿題に集中するには音量が過剰だったことを表している。したがって、その音量のもとでは宿題に集中できないという読みが自然である。

ただし、too が常に物理的な不可能を表すわけではない。この文で問題になっているのは、音楽の音量と集中する行為との関係であり、子どもたちに宿題へ集中する能力がないという意味ではない。

また、was は過去形なので、音楽の音量について述べている時点は過去である。一方、英文には、子どもたちが実際に宿題を始めたかどうかや、その後に音量が下げられたかどうかは示されていない。

「音楽がうるさすぎて、子どもたちは宿題に集中できなかった」なども、原文の程度関係を保つ自然な別訳として認められる。ただし、「子どもたちは宿題を諦めた」「音楽を止めた」など、原文にない行動を付け加えてはいけない。

too＋形容詞＋to を読むときは、形容詞が表す性質を確定し、to 句の行為を基準にその程度が過剰であることを捉える。これによって、目的を表す to 句との混同を防ぎ、英文の意味関係を正確に日本語へ移せる。

演習問題

1

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：brochure「パンフレット」／historic「歴史のある」／village「村」

The travel brochure lists five historic villages to visit during the spring holiday.

a. 「to visit during the spring holiday」が何を説明し、両者がどのような意味関係にあるか、一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

2

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：wooden「木製の」／bench「ベンチ」／fountain「噴水」／town square「町の広場」

A wooden bench to sit on stands beside the fountain in the busy town square.

a. 「to sit on」が何を説明し、両者がどのような意味関係にあるか、一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

3

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：chef「料理人」／nearby「近くの」／farm「農場」

The chef visited a nearby farm on Friday morning to choose fresh tomatoes for the restaurant.

a. 「to choose fresh tomatoes for the restaurant」が何を説明し、両者がどのような意味関係にあるか、一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

4

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：relieved「ほっとした、安心した」／ticket gate「改札口」

The parents were relieved to find their lost child near the ticket gate at the station.

a. 「to find their lost child near the ticket gate at the station」が何を説明し、両者がどのような意味関係にあるか、一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

5

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：crowded「混雑した」／quiet「静かな、落ち着いた」

The restaurant was too crowded for the family to enjoy a quiet dinner that evening.

a. 「to enjoy a quiet dinner that evening」が何を説明し、両者がどのような意味関係にあるか、一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

6

次の英文を読み、設問に答えよ。

語注：scoreboard「得点表示板」／spectator「観客」／back row「一番後ろの列」

The numbers on the scoreboard were large enough for spectators to read from the back row.

a. 「to read from the back row」が何を説明し、両者がどのような意味関係にあるか、一組で答えよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

演習問題の解答・解説

1

a. 構造の解答

説明先は five historic villages（5 つの歴史ある村）の中心語 villages である。

villages は visit という動作の対象であり、「春の休暇中にその村々を訪れる」という関係になっている。to visit during the spring holiday は、どのような村なのかを後ろから説明している。

〈The travel brochure〉 lists
S V

〈〈five historic villages〉 〔to visit (during 〈the spring holiday〉)〕〉.
O

S “The travel brochure” / 主節の主語 / The travel brochure が主節の主語。情報を掲載しているのは旅行パンフレットである。
V “lists” / 主節の動詞 / lists が主節の述語動詞。パンフレットが情報を載せている現在の状態を表す。
O “five historic villages to visit during the spring holiday” / 主節の目的語全体 / five historic villages to visit during the spring holiday が lists の目的語。中心語は villages であり、to 句による後置修飾を含む。名詞内部の関係は詳細ビューで示す。

〈The travel brochure〉 lists 〈〈five historic villages〉
V 名詞の中心語

〔to visit (during 〈the spring holiday〉)〕〉.
名詞を説明する to 句

V “lists” / 主節の動詞 / lists が主節の述語動詞。to 句内部の visit とは異なる。
phrase “villages” / 名詞の中心語 / villages は five historic villages の中心語であり、visit という動作の意味上の対象。歴史ある 5 つの村を表す。
phrase “to visit during the spring holiday” / 名詞を説明する to 句 → phrase “villages” / to visit during the spring holiday は villages を後ろから説明する。内部の動詞は visit であり、visit villages という対象関係が成立する。during the spring holiday は訪問を想定する時期を示す。訪問者は特定されず、訪問の実行や予定の確定も述べられていない。

b. 全文和訳

直訳

その旅行パンフレットは、春の休暇中に訪れるための歴史ある村を 5 つ載せている。

満点の訳

その旅行パンフレットには、春の休暇中の訪問先として、歴史ある村が 5 つ紹介されている。

構造と読み方の解説

まず、文の中心は The travel brochure lists five historic villages である。主語は The travel brochure（その旅行パンフレット）、述語の中心は lists（載せている、列挙している）であり、その対象が five historic villages（5 つの歴史ある村）である。

その後ろの to visit during the spring holiday は、villages を説明している。visit は「～を訪れる」という他動詞なので、visit villages（村々を訪れる）という関係が成立する。つまり、村が何かを訪れるのではなく、村が訪問の対象になっている。

この to 句を lists の目的として「村を訪れるためにパンフレットが列挙している」と読むと、誰が何をするのかという関係を取り違える。この文では、to 句を名詞 villages の後ろからの説明として捉えることで、自然な意味になる。

訳で注意する点

historic は単に「古い」という意味ではなく、「歴史ある」「歴史的な」という意味を持つ。村が 5 つあるという数量も落としてはいけない。また、lists は現在形なので、パンフレットに情報が掲載されている現在の状態として訳す。

to visit は訪問先としての村を説明しているだけであり、誰かが実際に訪れたことや、訪問する予定が確定していることまでは述べていない。

「春休みに訪れるのに適した歴史ある村を 5 つ紹介している」なども、訪問先を紹介するという原文の意味を保つ自然な別訳として認められる。ただし、実際に訪問したという事実や、確定した旅行計画を付け加えないことが重要だ。

2

a. 構造の解答

説明先は A wooden bench（木製のベンチ）の中心語 bench である。

bench は sit on という動作の対象となる場所を表し、「そのベンチに座る」という関係になっている。to sit on は、どのようなベンチなのかを後ろから説明している。

〈〈A wooden bench〉〔to sit on〕〉 stands
S V

(beside 〈〈the fountain〉〔in 〈the busy town square〉〕〉).
M

S “A wooden bench to sit on” / 主節の主語全体 / A wooden bench to sit on が主節の主語。中心語は bench であり、to sit on がその名詞を後ろから説明する。内部関係は詳細ビューで示す。
V “stands” / 主節の動詞 / stands が主節の述語動詞。ここではベンチの所在を表す。to 句内部の sit とは区別する。
M “beside the fountain in the busy town square” / ベンチの所在 → V “stands” / beside the fountain in the busy town square はベンチの所在を示す。本教材では in the busy town square を fountain への説明として捉える。広くベンチの所在を表す読みも自然であり、いずれも町の広場の噴水脇にベンチがあるという関係を保つ。

〈〈A wooden bench〉〔to sit on〕〉 stands (beside 〈〈the fountain〉〔in
主語内の中心名詞　名詞を説明する to 句　V

〈the busy town square〉〕〉).

phrase “bench” / 主語内の中心名詞 / bench は A wooden bench の中心語。sit の直接の目的語ではなく、前置詞 on を介して座る場所を表す。
phrase “to sit on” / 名詞を説明する to 句 → phrase “bench” / to sit on が bench を後ろから説明する。内部の動詞は sit であり、sit on a bench という関係が成立する。on は必要な前置詞である。座る人は特定されず、実際に誰かが座ったことも述べられていない。
V “stands” / 主節の動詞 / stands が主節の述語動詞。ベンチが存在する場所を述べており、to 句内部の sit とは別の動詞関係である。

〈〈A wooden bench〉〔to sit on〕〉 stands (beside 〈〈the fountain〉
V　場所を説明される名詞

〔in 〈the busy town square〉〕〉).
噴水の場所

V “stands” / 主節の動詞 / stands はベンチの所在を表す主節の述語動詞。
phrase “fountain” / 場所を説明される名詞 / fountain は the fountain の中心語。ベンチの位置を示す beside の後ろに置かれている。
phrase “in the busy town square” / 噴水の場所 → phrase “fountain” / in the busy town square は、本教材では fountain を後ろから説明する。busy town square は人通りの多い町の広場を表す。一方、この句をベンチの所在を広く示すものとして捉える読みも自然であり、唯一の分析に限定しない。

b. 全文和訳

直訳

座るための木製のベンチが 1 脚、人の行き来の多い町の広場にある噴水のそばにある。

満点の訳

人通りの多い町の広場には、噴水のそばに座れる木製のベンチが 1 脚ある。

構造と読み方の解説 まず、文の中心は A wooden bench stands beside the fountain である。主語の中心は bench（ベンチ）であり、述語の中心は stands である。ここでの stands はベンチの所在を表し、「ベンチが噴水のそばにある」という意味になる。

主語の中にある to sit on は、bench を後ろから説明している。この関係を考えるときは、sit という動詞の働きに注目する。

sit は、この文では「座る」という自動詞であり、bench を直接の目的語にはしない。「ベンチに座る」は sit on a bench と表すため、to sit on の on が必要になる。

つまり、bench は sit の直接の目的語ではなく、前置詞 on を通して座る場所として結び付いている。on を無視して「ベンチを座る」と訳したり、ベンチ自体が座る動作をすると考えたりしてはいけない。

場所の関係と訳で注意する点

in the busy town square は、場所についての情報を付け加えている。

本教材の訳例では、the fountain in the busy town square を「人の行き来の多い町の広場にある噴水」と捉え、噴水の場所を説明する読みを採用している。

一方、in the busy town square をベンチの所在を広く示す表現として捉え、「人通りの多い町の広場で、ベンチが噴水のそばにある」と読むことも自然である。どちらも、広場内の噴水のそばにベンチがあるという位置関係を保っており、一方だけを正しい分析とする必要はない。

また、busy は人の行き来や活動が多い様子を表すため、「忙しい広場」ではなく「人通りの多い広場」「にぎやかな広場」と訳すのが自然だ。

英文はベンチの存在と場所を述べているが、誰かが実際に座ったことまでは示していない。「座れる木製のベンチ」「腰掛けるための木製ベンチ」なども、to sit on と bench の関係を保つ自然な訳として認められる。

©ミライコーチング

3

a. 構造の解答

説明先は visited a nearby farm on Friday morning（料理人が金曜日の朝に近くの農場を訪れた）という主節の行為である。

to choose fresh tomatoes for the restaurant は、その行為の目的を表している。「レストランで使う新鮮なトマトを選ぶために、農場を訪れた」という意味関係になっている。

〈The chef〉 visited 〈a nearby farm〉 (on 〈Friday morning〉)
S V O M
(to choose 〈〈fresh tomatoes〉 〔for 〈the restaurant〉〕〉).
M

S “The chef” / 主節の主語 / The chef が主節の主語。農場を訪れた料理人であり、to 句内部の choose の意味上の主体でもある。
V “visited” / 主節の動詞 / visited が主節の述語動詞。料理人が農場を訪れたという過去の行為を表す。
O “a nearby farm” / 主節の目的語 / a nearby farm が visited の対象。近くの農場という訪問先を表す。to 句内部の choose の対象とは異なる。
M “on Friday morning” / 訪問した時 → V “visited” / on Friday morning は料理人が農場を訪れた時を示す。訪問が金曜日の朝に行われたことを表す。
M “to choose fresh tomatoes for the restaurant” / 訪問の目的 → V “visited” / to choose fresh tomatoes for the restaurant は visited という主節の行為の目的を説明する。レストラン用の新鮮なトマトを選ぶために農場を訪れたという関係。訪問は行われたが、トマトの選定や購入が実現したことまでは述べていない。

〈The chef〉 visited 〈a nearby farm〉 (on 〈Friday morning〉) (to choose
V V
〈〈fresh tomatoes〉 〔for 〈the restaurant〉〕〉).
O

V “visited” / 主節の動詞 / visited は料理人が実際に行った農場への訪問を表す。to 句内部の choose とは区別する。
V “choose” / to 句内部の動詞 / choose は to によって導かれる非定形の動詞。意味上の主体は The chef である。to choose 以下は visited の目的を説明しているが、実際に選んだことまでは示さない。
O “fresh tomatoes for the restaurant” / choose の目的語全体 / fresh tomatoes for the restaurant が choose の対象。中心語は tomatoes であり、新鮮なトマトを表す。本教材では for the restaurant をトマトの用途を示す修飾語として扱う。内部の関係は別の詳細ビューで示す。

〈The chef〉 visited 〈a nearby farm〉 (on 〈Friday morning〉) (to choose 〈〈fresh
tomatoes〉 〔for 〈the restaurant〉〕〉).
用途を説明される名詞　トマトの用途

phrase “tomatoes” / 用途を説明される名詞 / tomatoes は fresh tomatoes の中心語。choose の対象となる新鮮なトマトを表す。
phrase “for the restaurant” / トマトの用途 → phrase “tomatoes” / for the restaurant は、本教材では tomatoes を説明する。「レストランで使うトマト」という関係である。一方、レストランのために選ぶという choose への付加として読むことも自然であり、どちらも店用のトマトを選ぶという意味を保つ。選定や購入の達成は断定しない。

b. 全文和訳

直訳

その料理人は、レストランのために新鮮なトマトを選ぶため、金曜日の朝に近くの農場を訪れた。

満点の訳

その料理人は金曜日の朝、レストランで使う新鮮なトマトを選ぼうと、近くの農場を訪ねた。

構造と読み方の解説 文の中心は The chef visited a nearby farm on Friday morning である。主語は The chef（その料理人）、述語の中心は visited（訪れた）であり、a nearby farm（近くの農場）が訪問先を表している。on Friday morning は、その訪問が行われた時を示す。

続く to choose fresh tomatoes for the restaurant は、なぜ料理人が農場を訪れたのかを説明している。choose の対象は fresh tomatoes（新鮮なトマト）であり、for the restaurant は、それらがレストランで使われるものであることを示している。

for the restaurant は、トマトの用途を示すとも、レストランのために選ぶという行為の目的を補足するとも捉えられる。いずれの場合も、レストラン用のトマトを選ぶという意味は変わらない。

この to 句は、直前の farm という名詞の種類を説明するのではなく、主節の visited という行為に目的を付け加えている。「何のために農場を訪れたのか」という問いに答えるまとまりとして読むことで、文全体の意味がつながる。

訳で注意する点

visited は過去形なので、料理人が金曜日の朝に農場を訪れたことは、実際に起きた出来事として述べられている。

しかし、to choose は訪問の目的を示すだけである。料理人が実際にトマトを選んだかどうか、あるいは購入したかどうかまでは分からない。

したがって、「新鮮なトマトを選んで買った」「トマトを仕入れた」と訳すと、原文にない実行事実を加えてしまう。

「レストラン用の新鮮なトマトを選ぶために、近くの農場を訪問した」なども、主体・時点・目的を保つ自然な別訳として認められる。

4

a. 構造の解答

説明先は were relieved（安心した、ほっとした）という両親の感情を表す部分である。

to find their lost child near the ticket gate at the station は、その感情が生じた原因を説明している。「迷子になっていた自分たちの子どもを、駅の改札口付近で見つけたことで、両親は安心した」という意味関係になっている。

〈The parents〉 were 〔relieved
S V C

(to find 〈their lost child〉 (near 〈〈the ticket gate〉 〔at 〈the station〉〕〉))〕.
M

S “The parents” / 主節の主語 / The parents が主節の主語。安心した両親を表し、to 句内部の find の意味上の主体でもある。
V “were” / 主節の動詞 / were が主節の述語動詞。過去の状態を表す。
C “relieved” / 感情を表す形容詞 / relieved は両親がほっとした、安心したという感情を表す。
M “to find their lost child near the ticket gate at the station” / 感情の原因 → C “relieved” / to find their lost child near the ticket gate at the station は relieved という感情が生じた原因を説明する。両親が迷子になっていた自分たちの子どもを駅の改札口付近で見つけたことで安心したという関係。この過去肯定文では発見が実際に起きた出来事として述べられている。子どもが迷子になった場所は特定されていない。

〈The parents〉 were 〔relieved (to find 〈their lost child〉
S V C V O

(near 〈〈the ticket gate〉 〔at 〈the station〉〕〉))〕.
M

S “The parents” / 感情を経験する人 / The parents は主節の主語であり、安心した人たち。to 句内部の find についても意味上の主体となる。
V “were” / 主節の動詞 / were は主節の述語動詞。to 句内部の find とは区別する。
C “relieved” / 感情の中心 / relieved が両親の安心した気持ちを表す。後続の to find 以下の出来事が、その感情の原因になっている。
V “find” / to 句内部の動詞 / find は to によって導かれる非定形の動詞。意味上の主体は The parents である。子どもを発見したことが relieved の原因であり、find は主節の述語動詞ではない。
O “their lost child” / find の対象 / their lost child が find の目的語。their は両親を指し、lost child は迷子になっていた子どもを表す。子どもが亡くなったという意味ではない。
M “near the ticket gate at the station” / 発見した場所 → V “find” / near the ticket gate at the station は、子どもを見つけた場所を説明する。本教材では at the station が ticket gate を説明する読みを採用する。駅という広い場所を発見の場所として捉える読みも自然である。いずれも発見場所が駅の改札口付近であることを示し、迷子になった場所までは特定しない。

〈The parents〉 were 〔relieved (to find 〈their lost child〉 (near 〈〈the ticket gate〉 〔at 〈the station〉〕〉))〕.
場所を説明される名詞　改札口の場所

phrase “gate” / 場所を説明される名詞 / gate は the ticket gate の中心語。子どもを発見した場所を示す near の後ろに置かれている。
phrase “at the station” / 改札口の場所 → phrase “gate” / at the station は本教材では gate を後ろから説明する。「駅にある改札口」という関係である。一方、駅を子どもを発見した広い場所として捉える読みも自然である。発見場所は駅の改札口付近だが、子どもがどこで迷子になったかは分からない。

b. 全文和訳

直訳

その両親は、迷子になっていた自分たちの子どもを駅の改札口の近くで見つけて、安心した。

満点の訳

その両親は、迷子になっていた自分たちの子どもを駅の改札口付近で見つけ、ほっとした。

構造と読み方の解説

まず、文の中心は The parents were relieved である。主語は The parents（その両親）であり、were relieved は両親が安心したという過去の感情を表している。

ここで relieved は、心配や不安が和らいで安心した状態を表す形容詞である。では、両親は何があって安心したのだろうか。

その原因を説明しているのが、to find their lost child near the ticket gate at the station である。find の対象は their lost child（彼らの迷子になっていた子ども）であり、their は主語の The parents を受けている。

この to 句は「子どもを見つけるために安心した」という目的を表しているのではない。子どもを見つけたことが原因となって、両親が安心したという関係である。

場所の関係と訳で注意する点

near the ticket gate at the station は、子どもが見つかった場所についての情報を示している。

本教材では、at the station を the ticket gate に結び付け、「駅にある改札口の近く」と捉える。ただし、駅という広い場所で子どもを見つけ、その具体的な位置が改札口付近だったと読むことも自然である。

どちらの分析でも、子どもが駅の改札口付近で見つかったという位置関係を保つ必要がある。

また、lost child は「迷子になった子ども」を意味する。lost を単独で「失われた」と訳し、「亡くなった子ども」などと解釈してはいけない。

感情の原因となる出来事の扱い

この英文では、were relieved が過去の感情を表しており、to find はその安心をもたらした出来事を示している。

したがって、両親が子どもを見つけたことは、実際に起きた出来事として読むのが自然である。「子どもを見つけるつもりで安心した」「見つけられることを期待して安心した」という意味ではない。

「両親は駅の改札口のそばで迷子のわが子を発見し、安心した」なども、発見と感情の因果関係を保つ自然な別訳として認められる。

ただし、発見後に子どもがどのような行動を取ったか、両親が子どもを連れて帰ったかといった情報は原文にないため、付け加えない。

5

a. 構造の解答

説明先は too crowded が表す、レストランの混雑の程度である。

to enjoy a quiet dinner that evening は、その程度を判断する基準となる行為を示している。「その晩、家族が落ち着いて夕食を楽しむには、レストランが混雑しすぎていた」という意味関係になっている。

〈The restaurant〉 was 〔too crowded
S V C
(for 〈the family〉 to enjoy 〈a quiet dinner〉 (that evening))〕.
M

S “The restaurant” / 主節の主語 / The restaurant が主節の主語。混雑の程度を述べられている対象であり、to 句内部の enjoy の主体ではない。
V “was” / 主節の動詞 / was が主節の述語動詞。レストランの過去の状態を表す。
C “too crowded” / 混雑の程度 / too crowded は混雑がある基準に対して過剰だったことを示す。crowded が混雑した状態を表し、too がその程度を示している。
M “for the family to enjoy a quiet dinner that evening” / 程度の判断基準 → C “too crowded” / for the family to enjoy a quiet dinner that evening は too crowded の程度を判断する基準を示す。その晩、家族が落ち着いて夕食を楽しむにはレストランが混雑しすぎていたという関係。for the family は to 句内部の動作主体を示す。落ち着いた夕食を楽しめる状況ではなかったが、夕食を一切取れなかったとは述べていない。

〈The restaurant〉 was 〔too crowded (for 〈the family〉 to enjoy 〈a quiet dinner〉
V C S V O
(that evening))〕.
M

V “was” / 主節の動詞 / was が主節の述語動詞。to 句内部の enjoy とは区別する。
C “too crowded” / 混雑の程度 / too crowded はレストランの混雑が過剰だったことを表す。後続の for the family to enjoy a quiet dinner that evening が、混雑しすぎていたと判断する基準になる。
S “the family” / to 句内部の動作主体 / family は直前の for the family によって示される enjoy の意味上の主体。夕食を楽しむのは家族であり、レストランではない。
V “enjoy” / to 句内部の動詞 / enjoy は to によって導かれる非定形の動詞。意味上の主体は the family である。主節の was とは区別する。落ち着いた夕食を楽しむという行為が、too crowded の程度を判断する基準になっている。
O “a quiet dinner” / enjoy の対象 / a quiet dinner が enjoy の目的語。quiet はここでは静かで落ち着いた食事の様子を表す。落ち着いて夕食を楽しむことが難しいのであり、食事そのものが一切不可能だったとは述べていない。
M “that evening” / 行為の時 → V “enjoy” / that evening は家族が落ち着いた夕食を楽しむことについて、その晩という時を示す。レストランの混雑も過去の状況として述べられている。家族が食事を始めたことや店を出たことは示されていない。

b. 全文和訳

直訳

そのレストランは、その晩その家族が静かに夕食を楽しむには混雑しすぎていた。

満点の訳

その晩、レストランはあまりにも混んでいて、家族が落ち着いて夕食を楽しめる状態ではなかった。

構造と読み方の解説

文の中心は The restaurant was too crowded である。主語は The restaurant（そのレストラン）、述語の中心は was であり、too crowded がレストランの混雑した状態を説明している。

crowded は「混雑した」という意味の形容詞である。too が付くことで、ある基準に対して混雑の程度が過剰であることを表す。

その基準を示しているのが、for the family to enjoy a quiet dinner that evening である。for the family は enjoy という動作を行う人を示し、a quiet dinner がその対象になっている。

つまり、レストランが夕食を楽しむのではなく、家族が夕食を楽しむという関係だ。その行為に対して、レストランの混雑が過剰であると述べている。

ここで to enjoy a quiet dinner that evening を「静かな夕食を楽しむために」と目的として訳すと、意味が変わってしまう。この to 句は、レストランが混雑していた目的ではなく、混雑の程度を判断する基準を表している。

訳で注意する点

この文の too crowded は、その晩、家族が落ち着いて夕食を楽しむには混雑しすぎていたことを表す。したがって、落ち着いた夕食を楽しめる状況ではなかったという読みが自然である。

ただし、家族が夕食を一切取れなかったという意味ではない。また、家族が実際に食事を始めたのか、別の店へ移動したのかといったことも原文には示されていない。

was は過去形であり、that evening は「その晩」を表す。訳す際には、過去の状況と時間の情報を保つ必要がある。

「その晩、家族がゆっくり夕食を楽しむには、レストランが混みすぎていた」なども自然な別訳として認められる。

重要なのは、**落ち着いて夕食を楽しむという行為に対して、混雑の程度が過剰だった**という関係を正確に保つことだ。

6

a. 構造の解答

説明先は large enough が表す、得点表示板の数字の大きさの程度である。

to read from the back row は、その程度を判断する基準となる行為を示している。「観客が一番後ろの列から数字を読み取るのに十分な大きさがあった」という意味関係になっている。

〈〈The numbers〉 〔on 〈the scoreboard〉〕〉 were 〔large enough (for spectators to read (from 〈the back row〉))〕.
S　V　C　M

S “The numbers on the scoreboard” / 主節の主語全体 / The numbers on the scoreboard が主節の主語。中心語は numbers であり、on the scoreboard が数字の表示場所を説明する。数字は to 句内部の read の意味上の対象でもある。
V “were” / 主節の動詞 / were が主節の述語動詞。数字の大きさについて過去の状態を述べている。
C “large enough” / 数字の大きさの程度 / large enough は数字が必要な程度に十分大きかったことを表す。large が大きさを示し、enough がその程度の十分さを示している。
M “for spectators to read from the back row” / 程度の判断基準 → C “large enough” / for spectators to read from the back row は large enough の程度を判断する基準を示す。観客が一番後ろの列から数字を読み取るのに十分な大きさだったという関係。for spectators は to 句内部の動作主体を示し、read の対象は主節の The numbers on the scoreboard に対応する。実際に読んだことや観客の人数、表示されていた得点は述べられていない。

〈〈The numbers〉 〔on 〈the scoreboard〉〕〉 were 〔large enough (for spectators to read (from 〈the back row〉))〕.
主語内の中心名詞　数字の表示場所　V　C　S　V　M

phrase “numbers” / 主語内の中心名詞 / numbers は The numbers on the scoreboard の中心語。同時に、to 句内部の read の意味上の対象にも対応する。数字が何かを読むのではなく、観客が数字を読むという関係である。
phrase “on the scoreboard” / 数字の表示場所 → phrase “numbers” / on the scoreboard は numbers を後ろから説明する。数字が得点表示板に表示されているという関係を示す。
V “were” / 主節の動詞 / were は主節の述語動詞。to 句内部の read とは区別する。
C “large enough” / 大きさの程度 / large enough は数字の大きさが十分だったことを表す。後続の for spectators to read from the back row が、その十分さを判断する基準になる。
S “spectators” / to 句内部の動作主体 / spectators は直前の for spectators によって示される read の意味上の主体。数字を読むのは観客である。観客の具体的な人数は示されていない。
V “read” / to 句内部の動詞 / read は to によって導かれる非定形の動詞。意味上の主体は spectators であり、対象は文頭の numbers に対応する。最後列から数字を読み取るという行為が large enough の基準である。実際に数字を読み終えたことは述べられていない。
M “from the back row” / 読み取る位置 → V “read” / from the back row は数字を読み取る位置を示す。観客が一番後ろの列からでも読める程度の大きさだったという関係であり、実際に観客がその位置から数字を読んだことまでは断定しない。

b. 全文和訳

直訳

得点表示板の数字は、観客が一番後ろの列から読むのに十分な大きさだった。

満点の訳

得点表示板の数字は、観客が最後列からでも読み取れるほど大きかった。

構造と読み方の解説

まず、文の中心は The numbers on the scoreboard were large enough である。主語の中心は numbers（数字）であり、on the scoreboard がどこの数字なのかを説明している。

述語の中心は were であり、large enough が数字の大きさを表している。large は「大きい」という性質を示し、enough は、その性質がある基準に対して十分な程度に達していることを表す。

では、何をするのに十分な大きさなのだろうか。

その基準となる行為が、for spectators to read from the back row である。for spectators は read という動作を行う人を示している。

read の対象は文頭の The numbers on the scoreboard である。つまり、観客が得点表示板の数字を読むという関係になっている。from the back row は、その数字を読む位置が一番後ろの列であることを表す。

この文では、数字が「最後列から読む」という行為に対して十分な大きさだったと述べている。to read を単純に「読むために」と訳し、数字が大きかった目的を述べていると考えるのではなく、**読めるかどうかを判断する基準として、数字の大きさと to 句を結び付ける**ことが重要だ。

訳で注意する点

large enough は、観客が最後列から数字を読み取るのに十分な大きさであったことを表している。

ただし、実際に観客が数字を読んだことまでは述べていない。「最後列の観客が数字を読み取った」と訳すと、原文にない実行事実を付け加えてしまう。

また、spectators は複数形だが、観客の具体的な人数は示されていない。得点表示板に表示されていた数字の個数や、実際の得点も分からないため、これらを推測して訳に加えない。

were は過去形なので、数字が十分な大きさだったという過去の状態を表している。

「得点表示板の数字は、観客が一番後ろの席からでも読める大きさだった」なども、数字の大きさと読み取る行為の関係を保つ自然な別訳として認められる。

enough＋to では、ある行為を行うのに十分な程度があることと、その行為が実際に行われたことを区別して読む必要がある。